『モノトーンな時代』

山口　恭弘

正月初夢を見た。富士や鷹、茄子とは凡そ懸離れた味も素気も無い会社関係の厭な人の夢であった。最近も良く見る、忘れたいと思い朝刊を具に読み出した。念を入れると目に止った。長谷川櫂氏、選者で説明者の四季欄

〝原点のように冬の蝶がある〟工藤惠。

〈冷たい風に吹かれて命を終えようとしている蝶。それは一つの命の終点のように見えるが、原点であるというのだ。原点とは何かをはじめる出発点であり、迷ったときに思い出せる場所でもある。〉と書かれていた。

「原点」此の言葉のひゞびきに触発されたと言っている。が、自分自身この句が好きたかと思った訳ではなく、詠み手の人には失礼だが病床にある人ではないかと想像してしまった。オー・ヘンリーの短編小説に、病床の窓外に見える木の葉が木枯しに吹かれ、日に日に散って、最後に一葉が残り、病人に生きる勇気を与える。と言うストーリーを思い出したりした。又、一方好きな俳句、小林一茶の句があるのを思い出させて呉れた。

〝つゆの世はつゆの世ながらさりながら〟

一茶が晩年に吾子を亡くし悲嘆に沈んで居た頃に詠んだとのことだが、確か田辺聖子著の一茶研究本を読んだ記憶があり、感性に富んだ持主だなと感心した。句自体が大きな起伏を踏まえ且つ宇宙観から詠まれたものと解釈した次第。之は彼の原点であった気もする。

人生色々。扨、自分はと振り返る――中学生の頃、国語の時間に俳句を作ることを宿題に出された。それが始まりだが、国語の授業は好きでもあり、少なからず頑張った積りで発表したが、評価は得られずで、それ以来俳句を作ることが疎遠になってしまった。尤も中学一年生位では、五・七・五の言葉を並べればいゝかと、作ったのが次のものであった。

〝下駄の先歩くたんびにおじぎする〟

素足で下駄の感覚は頭の隅に残って居たのかも知れない。たわいのないことだが嬉しくなった。当時履物は草履や下駄が中心で靴は少なく、中学生になった時に新しい運動靴を買って貰い、それを履いて喜んで通学した記憶が甦って来た。

昭和二十年代前半の頃は、京浜工業地帯の焼け跡が彼方此方に残って居た。復興著しくあっと言う間の一、二年で変化して行ったが、丁度小学校五年生頃かの集合写真を見ると、下駄履きが殆で、服装は皆まちまちである。中には突っ掛けを履いて写って居る。「そう焼跡に行ってベアリングを拾って来て、油を指して廻る様にする。それを下駄や突っ掛けの下に工夫して作る。謂ばローラスケートで小学校に通ったりしたこともあったな」幼馴染の会話は楽しい。

小学校、中学校、夫々に生々しい原点がある。戦時中に体験した、あの空襲警報のサイレン、夜間京浜工業地帯を爆撃したアメリカ軍のＢ２９の襲来は眼に焼き付いて居る。戦火に赤々と照らされた巨大な銀翼が脳裏にある。「此れ履いて、逃げるんだよ。みんないゝかい」お袋の声で兎に角慌てゝ手を引かれて鶴見の下町から本山目指して、半分寝ぼけたまゝ確か親父の草履を引っ掛けて逃げた。Ｂ２９が落とした焼夷弾は街の家の方にも来たのか、途中燃えている家を横目で見た。

「橋が燃えてなくて良かったよ」そんな声も聞こえた。

〝少年の夢を砕くか焼夷弾〟

焼夷弾をアメリカ軍と詠んだ方が良いのかなと思ってしまう。当時は軍国少年が当り前の時代、灯火管制、防火演習と言っては町内で大人達は訓練実施の明け暮れであった。従って男親は「家を守るぞ、お前達は先に逃げるんだ」と。五才年上の兄は気丈にも「僕は逃げない、守るぞ」流石に旧制中学生は軍事教練を学科に組み込まれていた所為もあった。鶴見には曹洞宗の本山総持寺があり通称本山と言い、逃げた所からの展望は開けていた。

（続く）